

視写
言葉の力をつけよう（新聞コラムの視写⑦）
佐賀新聞 有明抄「桜」
名前

あちこちで桜の花はほころび始めているの
に、異常気象のせいかわ、雨の日が続いた。開
ききらずに散る桜の姿を想像して、心穏やか
でなかった人も多いだろう。その無情の雨も
やっとおさまった。週末は天気も回復し、絶
好の花見日和となりそうだ。

雨が上がった昨日、佐賀市の神野公園駐車
場に車を止め、多布施川沿いを歩いた。公園
内の桜はまだ三分咲きだったが、川辺の桜は
もう満開に近かった。水との相性がいいのだ
ろう。流れに吸い寄せられるように、川面に
花を付けた枝を伸ばしている。

年老いた木もあった。こけむした幹の中は
腐れて空洞になりながらも、精いっぱいみず
みずしいピンクの花を咲かせている。このけ
なげさ、花の命の短さが、多くの日本人の心
を動かしてきた。桜を歌った詩歌には名作が
多い。いくつが胸にとどめて見れば、花の景
色も変わってくる。

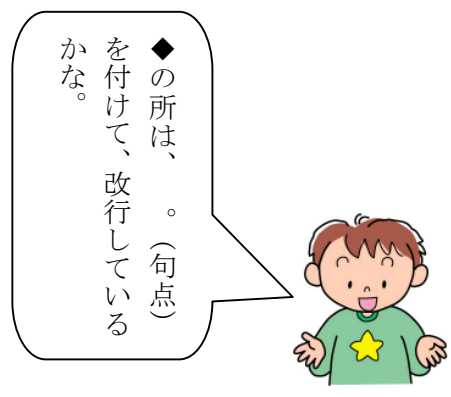
「世の中にたえて桜のなかりせば春の心は
のどけからまし」。在原業平は、桜の花を胸
の高鳴りを抑えきれない恋人のようにとらえ
ている。近づいてみれば、色もはつきりしな
い白い花だが、人の心を波立たせるような不
思議な魅力がある。

詩人の三好達治は「あはれ花びらながれ」
をみなごに花びらながれ／をみなごしめやか
に語らひあゆみ／うららかなの聲音（あしおと）
空にながれ」とうたった。当時三好は東大の
学生だった。青春の華やかさとはかなさが、
流れる花びらと女の子たちの歩みから立ち上
がってくる。

若い人たちも桜には格別の思い入れがある
ようだ。森山直太郎の「さくら（独唱）」、
ケツメイシの「さくら」、コブクロの「桜」
とどれも名曲だ。なぜこれほど桜は人の心を
騒がすのか。花の盛りに花の下に立てば、答
えが見つかるとも思えない。

760字 600字 400字 200字

解答



① 本来なら改行すべきところを、
紙面の都合上、続けて書くという意
味で、/で区切って書く場合があります。

② 点画に気を付けて書きましょう。

聲

音 キョウ
訓 あしおと

③ 行のはじめに（ ）がこないよう
に、文字とどじかっこを一つのます
に入れます。